

中村憲吉全集

中村憲吉全集

第四卷

中村憲吉全集 第四卷 (全四卷)

一九三八年一月十五日 第一刷発行  
一九八二年一月二十五日 第二刷発行

定価 七五〇〇円

著者 中村 憲吉

発行者 緑川 亨

発行所 千101 東京都千代田区一ツ橋二丁目  
鉄岩 波書店

電話 〇三上六千四二  
振替 東京六二六四〇

印刷・精興社 製本・松本製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

# 目次

日記……………一

大正三年……………三

大正四年……………四

大正五年……………六

大正六年……………七

大正七年……………八

大正八年……………一〇

大正九年……………一四

大正十年……………一〇

大正十三年……………二六

大正十四年……………三九

紀湯日記……………三二

大正十五年……………三五

昭和二年……………二四

昭和三年……………二五

昭和四年	二七
昭和五年	二六
昭和六年	三〇
昭和八年	三〇
昭和九年	三九

書翰

明治三十八年	一	通	四〇五
明治三十九年	四	通	四〇七
明治四十年	一	通	四一三
明治四十一年	三	通	四一六
明治四十三年	一	通	四二四
明治四十四年	十一	通	四三〇
明治四十五年	七	通	四三〇
大正元年	六	通	四三五
大正二年	十九	通	四三八
大正三年	十一	通	四四九
大正四年	十八	通	四五四
大正五年	九	通	四六三

大正六年	十三通	四六九
大正七年	十一通	四七七
大正八年	十九通	四八四
大正九年	二十四通	四九五
大正十年	二十一通	五一四
大正十一年	九通	五二六
大正十二年	二十通	五三一
大正十三年	三十二通	五四三
大正十四年	五十一通	五五七
大正十五年	五十六通	五六〇
昭和元年	四通	六〇七
昭和二年	三十三通	六〇九
昭和三年	十三通	六三二
昭和四年	二十二通	六三七
昭和五年	五十二通	六三七
昭和六年	四十六通	六六三
昭和七年	五十六通	六六五
昭和八年	九十二通	七五五
昭和九年	六通	七六三

書翰索引

一六六

卷末記

一

# 日 記





## 大正三年

一月一日。木曜。晴。風。

午前富士見軒行、源兄と共に年始。萩尾氏の所による。○その前より何か判然とせず心甚だ興奮せり。大方種々のこと云へるらし。

一月二日。金曜。

河野君來る。○午後白川君を訪ふ。○やつぱり僕は憤ろしい前夜のころでゐた。○古泉君不在。市川手兒奈社に詣る。

一月三日。土曜。

三島君來る。初め機嫌よし、後對坐堪へがたくなる。○齋藤君に電話をかける。○風呂。○夜長塚氏を訪ふ。話してゐると心靜まる。僕も戀だの女だのを離れて生活したい。○武居氏の繪を見る。

一月四日。日曜。

午後久保田の子供を病院に訪ふ、憐に思つた。○木下奎太郎氏の「靈巖島の自殺」よむ。夕方一寸讀むまいかと思つた、恐ろしい氣持せるゆゑ也。○夜カルタをとる。何等の感奮なし。事件のみ。

一月五日。月曜。

齋藤君を訪ふ、牧水の話など。而して同君の宅の新年宴會に列す、ひよいと見ると森田草平がゐる。カルタをとる。○今日は大分心平靜なりしが夜遅くかへりつつ心亂れた。

一月六日。火曜。

カルタを下宿でとる。○野田君来る。夜草場を訪ふ。田澤といふ人死すときく。

一月七日。水曜。

午後齋藤君来る。齋藤君の幼妻の話。雑誌の遅刊のことにつき古泉君を怒つた。○夜堀内のお母さんを訪ふ。明るい灯の下で皆と語る、安樂な氣になれた。○春兄に手紙を出す、久保田にも。

一月九日。金曜。

久保田の手紙もあり、齋藤君を電話にてよぶ。實は古泉君に對して餘り怒りすぎたと思つた。久保田に緩和の手紙をかく。夜古泉君来る、話をつける。遅刊は不安であると思つたが。○頭重し。

一月十日。土曜。

歌十餘首を作る。○久保田より來書。○家のことなど思ふ。運動をしたいと思ふ。○夜金谷訪問。

一月十一日。日曜。

河野氏來訪、一緒に茂吉君を往訪。古泉君アララギの話出る。百穂氏來る。「しのぶ戀路」の稽古をなす。

一月十二日。月曜。

金谷來る。○祖母危篤の電報來る。午後八時發歸省の途につく、弟と共に。車中「行人」をよむ。

一月十三日。火曜。

神戸にて倉田百三に會す。○後藤氏にとまる。鹿兒島の變事をきく、茫然。堀内との遺跡こはれし感して悲し。

一月十四日。水曜。

歸省。(布野の方、降灰ありし由)。一家騒然。○冬枯の川岸あらはなるごとく祖母病めり。

一月二十日。火曜。

今日は立ちたくなかりしが、高崎と約束及び電報あり、あわてて出立。○三次にて自動車いでず。船越君と話す。すでに旅の感あり。

一月二十一日。水曜。

四時發、一時著廣。高崎と會し快談。夜羽田にてのむ。遊ぶにその合はぬ點あれど、つくづく高崎を好人物と思ひたり。

一月二十二日。木曜。

高崎と二時頃共に撮影す。○出發三時。今少ししみじみ話して別れたかりし。

一月二十三日。金曜。

著京。心おちつかず。

一月二十四日。土曜。

齋藤君來る。○祖母死去の電報。○古泉訪問、(子供死去の由)。○いろいろ死ぬる夢をみる。祖母のこと思ふこと少し。

一月二十五日。日曜。

僕の誕生日だが無意味。○歌少し作る。○源兄を訪問。徹底せず、然し平穩な話。○何かしら悲觀して仕方なし。○齋藤君より電話、古泉君と和解の由。

二月九日。月曜。

學校。○久保田君來る。○高橋君來る。

二月十一日。水曜。

後藤氏、久保田君來り話す。兩氏共に去る。○百穂氏を訪ふ。

二月十四日。土曜。

學校。○高橋君と吉原見物。○佐藤春夫氏「赤光會」につき來書。

二月十六日。月曜。

學校。○蕨、齋藤、古泉君來る。

二月十七日。火曜。

新納ヒロよりボンタンの贈り物あり。大東をよぶ。金谷日曜日に咯血せし由。○夜ねむれず。

二月十八日。水曜。

學校。○金谷訪問。○呂昇をききにゆく。

二月十九日。木曜。

中島へ手紙。○金谷を訪問。

三月三日。火曜。

學校。橋田君を松江口村に訪ふ。

三月四日。水曜。

讀賣社より原稿料金壹圓送附。○學校へ出る。

三月六日。金曜。

入澤博士に受診。右肺尖微恙。高橋醫學士の世話になる。○父へ手紙。○蕨來訪。

三月七日。土曜。

後藤、春兄へ手紙。○齋藤來訪。○小石川小學校火事。○夜、銀座のカフェーヨーロッパの歌人の會に出席す。

三月九日。月曜。

平福さん夜来る。○金來らず、手紙來らず、心慰ます。○「桑の實」をよむ。○久保田へ手紙。

三月十二日。木曜。

名妓ぼんたの唄踊會へゆく。鈴木君をつれて行く。赤木君も同行。容姿、踊態、未だ盛なり。夜遅く歸る。○留守に後藤氏の來訪あり。

三月十三日。金曜。

齋藤君來訪。弟來訪。前田君來訪。○富士見軒訪問。後藤氏との會話をきく。○身體用心せねばならねども心配ばかりしてゐるんでは仕方なし。○祖母の四十九日。

三月十六日。月曜。

久保田より來書。○白川來る。○赤木氏と長塚氏を訪ふ。○夜日本橋に出る。

三月十九日。木曜。

白川來る。○詩歌へ歌を出す。○古泉を訪ふ。○岩谷來る。○蕨桐軒方へゆく。轉地につき聞くところあり。○久保田、父へ手紙を出す。心安けし。

三月二十日。金曜。

齋藤君來訪、共に郊外散歩、夕暮氏を訪ふ。

三月二十一日。土曜。

蕨君を訪ふ、留守。○古泉を訪ふ。尾山氏あり、變にはしやきてパーによる。歸る。

三月二十二日。日曜。

午後齋藤君の處にゆく。てる子さんと三人連れで大森に遊び、穴守にゆく。歸途カフェーライオンに行き、銀座亭に落語をきく。○桐軒氏不在中に來りし由。

三月二十三日。月曜。

赤木君身の經歷をかたる。○鈴木正夫君自作の筆立をくれる。○蕨桐軒留守。○古泉をとふ、不在。○ナルタケユカイニハナスベシ。

三月二十四日。火曜。

オカミ菅氏のことを話す、きく氣なし。○蕨桐軒を曙町にとふ、留守。○齋藤君をとふ、同君、痰をよこせといふ。

三月二十五日。水曜。

大東來る。○蕨來る、用件頼みもらひし人を見にゆく、松本樓にて會食。○夜源三郎兄等來る。旅支度をととのへる。

三月二十六日。木曜。

九時三十五分の汽車で本所より出發(桐軒を訪ひし故同人送りてくれる)、雨寒し。一時すぎ著(一宮)。海暗く風寒く、浪やかましく宿汚かりし故困りしが、氣をとりなほす。夜はねむる。

三月二十七日。金曜。

風晴を幸ひ散歩す。○長者町下車、○大原下車、小湊へゆく。○勝浦下車、料理屋で食事。○一宮驛歸著時おそし。

三月二十八日。土曜。

朝小舟にて海岸へ下る。○午後船頭給へ散歩、家をさがす。船頭給の小松原中よろし。○一宮、今日漁船獲物なく歸る。○午後二時より煙草をやめる。

三月二十九日。日曜。

今日は舊節句潮干狩といふ。朝より濱に人下りて居る。近在より人來る。九十九里岸玉拾人水に煙りて豆の如くつづく。○海岸をあるく。○午後中瀬より岩沼、茂原へ行き、夕かへる。

三月三十日。月曜。

一日雨はげし。諸方へ手紙を出す。○東京朝日買つてきてもらつてよむ。

三月三十一日。火曜。

父著京の様子。○一宮町に出て見る。○東浪見へまはる。○五日の月青く松原に沈まむとして灯を消すとガラス戸から見えた。

四月一日。水曜。

ゲル來らず。その内に來た。○歸京す。○夜父に會す。

四月二日。木曜。

父つれて市内見物。○夜武藏屋にて大井、野村兩氏を招きて會食す。

四月四日。土曜。

東京に歸ると睡眠が不足になりがちだ。○今日父は日光にゆく。○久保田へ手紙書きしが思ふやうならず、今日はお出すまいか。○白川にあふ。○大東をとふ。○雪ふる。

四月五日。日曜。

富士見軒へゆく。齋藤達氏に遇ふ。○齋藤茂吉氏を訪ふ、不在。○長塚節氏を訪ふ。古泉君と齋藤君の歌の評をきく。○夜富士見軒へゆく。○強ひて必要なかりしが薄荷パイプを買ふ。

四月六日。月曜。

午前八時父を送る。○父の傳言、源兄傳ふ、怒る。○赤木氏を病院に訪ふ。古泉君は未だ原稿を送らぬ由、腹立



つ。○思ひ出して残つた煙管を折る。これと永別の心算で二服のむ、三服のめば、又これと悪縁をつなぐやうになると思つたから。

四月七日。火曜。

久保田より手紙来る。○桐軒来る。高橋の話する。○齋藤に何度電話かくれども居らず。○夜遅く久保田へ手紙かく。

四月八日。水曜。

朝久保田への手紙出しにゆく。齋藤君のところへ寄る。雪降る、二人で見える。民友社による、未だ原稿来らず、大變怒る。齋藤、古泉へ手紙出す。○「東亞煙草」に源兄と會す。○新橋にて太田に會す、洋行の由。藤井に會す。○逗子養神亭泊。

四月九日。木曜。

逗子より葉山にゆく、而して秋谷まで行く、家を見つける、長老園。○鎌倉に下車、稻村崎に貸家を見付く。○鶴沼に著、金谷に會す。

四月十一日。土曜。

小田原發、ねむる。先日來矢張ねむりたらず。○後歸京。書物整理。來書數翰。○倉本友人の一高生犬飼寛君來る。

四月十二日。日曜。

久保田來る。丁度雜誌整理して居た。例の話。黙して溫和しく話をきく。齋藤、古泉、清水來る。久保田出てゆく。久保田かへる。

四月十三日。月曜。